

色川武大



引越貧乏

引越貧乏
色川武大

引越貧乏
ひっこしびんぼう

一九八九年 七月五日印刷
一九八九年 七月一〇日発行

著者 色川武大
いろかわ ぶだい

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話（業務部） 03—二六六—五一一一

（編集部） 03—二六六—五四一一

振替 東京四—八〇八

印刷 二光印刷株式会社

製本 大口製本株式会社

価格はカバーに表示してあります



© Takako Irokawa 1989,
Printed in Japan

（乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。）

ISBN4-10-331103-7 C0093

引越貧乏* 目次

暴飲暴食

7

五十歳記念

39

心臓破り

71

風と灯とけむりたち

101

第三の男

139

傷は浅いが

171

引越貧乏

199

装幀
和田誠

引
越
貧
乏

暴
飲
暴
食

タクシーを停めて、東京駅へ、といった。運転手が鸚鵡がえしに訊き返してくる。

私の声は、とおらないくぐもり声のうえに、小さい。声を大にしてしゃべるほどのことが、そうやたらにあるわけではないと思っているせいもあるが、勤勉でないから自信もうまれず、威嚇や断定をする折りに恵まれない。したがっていつもあいまいな声音になる。近頃の運転手は返答をしてくれない人が多いから、私のあいまいな言葉を先方流に受けとって、日比谷が渋谷になったり、大久保が荻窪になったりする。カミさんを連れて京都に行き、夜、琵琶湖ホテルに直行してくれ、といい、ひと眠りしているうちに、都ホテルについて、そのつもりで一泊したことがある。

それにくらべれば、この運転手さんなどはすぐに訊き返してくれるだけよろしい。私はすこし強い語調でいった。

「東京駅の、八重洲口まで、行ってください——」

運転手はアクセルを踏んだまま、身体ごと振り返ってまじまじと私をみつめ、片っぱうの掌を耳に当てて、

「え——？」

私は少したじたじとなった。そうしてこちら両掌を口に当ててメガホンがわりにしながら叫んだ。

「東京駅の、八重洲口——！」

「——八重洲口か」

初老の運転手はそれで前方を向いて運転に専念し、私は黙りこくって坐っていたが、なんだかどうもおちつかない。

耳が遠かろうと、眼が見えなかつと、事故さえ起きなければ少しもかまわないが、起きなければという前提が、この場合相当にあやふやに思える。たとえ視力が人一倍よいとしても、雄叫びのような声でなければきこえないとすると、反射神経はどうであろうか。悪いのは両耳か、片方か。五感のうちどこか悪いと他の部分の能力がそれだけ鋭くなるということはあるようだけれども。

しかし、彼は眼鏡をかけており、その眼鏡もややずり落ちていて、聴力をカバーするしつかりした視力がありそうにも思えない。

私は睡眠発作症ナルコレプシーという持病があつて、腰をおろすところでもすぐに眠りに落ちてしまうのであるが、今日はその発作が起きない。

（——糞。きまつてやがる）

と腹の中で毒づいた。

（——彼奴と事をおこすとなると、いつもこれだ。なんとなくよれてきて、順調という案配から遠くなるんだ）

タクシーはとにかく無事に走り終り、私は晴れて八重洲口の大地を踏みしめることができたが、ああ、よかった、という気分になれない。

順調に來たのではないというだけで、来てしまえば、来たというだけでよいような気がする。不愉快だからやめて帰ってしまおうというところまで氣持が煮つまらない。こういう中途半端な

気分で居るくらいなら、いっそ破綻してしまつた方がまだ納得がいくようにも思う。

逐琢が先に來て、駅ビルの中に立っている。

私も逐琢も、わりにずぼらで、特にお互いの約束はずばら同士という安心感があるうえに、さほどの重大要件で会うということが一度もないものだから、約束したきり忘れてしまつて、忘れなかつた方の一人が電話をかけて、こうして自分が履行した以上あの約束は本氣だつたのだということを説明し、改めて呼びだしたりすることがしばしばある。

それが今日は、賢しげに定刻前に來て待っている。どうも好印象にならない。

「——行き方に二通りあるんだ。どっちにするかね。豊橋でおりて、渥美半島の尖端まで行き、そこからフェリーで鳥羽に渡る」

「なにィ——」

「名古屋まで新幹線で行つて、近鉄の特急に乗りかえて、伊勢市か鳥羽でおりる。——おい、どうしたんだ」

私は常々、それほど上機嫌では居ないのだが、人前ではいつもニヤニヤしていて、一見、機嫌よさそうに見える男である。今は、怒っているわけではないが、笑いこぼれる心境には遠い。

「そんなふうには複雑なことを考えないで、行くなら、男らしく一直線で行きたいね。新幹線で行つて押しかけるとか、東京からフェリーを飛ばすとか」

「東名高速を、フェリーでか」

「気分としては、だ」

「まア、待て。——ただし、これから渥美半島の尖端まで行つても、フェリーの最終便は、出たあとだ」

「——それじゃア、そのコースは無いも同然じゃないか」

「しかし、明日は出る」

「波止場で、明日まで待つのか」

「そのへんに泊ればいいじゃないか」

「そんなに複雑にして、いったいどうしようというんだ」

「急ぐ旅じゃアないだろ。お互い休暇のつもりだ。伊勢に泊ろうと渥美に泊ろうと、泊るというだけのことさ。——渥美半島はいいところらしいぜ。ところが俺は一度もそのコースで帰ったことがないんだ」

「まァいい——」と私は半分ヤケでいった。

「まかせろよ。伊勢はとにかく君の故郷なんだから、どんなふうになでも勝手に行くがいい——」
逐琢を先に立てて、新幹線の切符の発売窓口に行った。彼がもし豊橋でおりに渥美にまわるようなら、場合によっては私は一人で名古屋まで突進して、そこでまた改めて行先を考えてもいいと思っていた。どうしても、伊勢に行かなければ死ぬというわけではない。

「名古屋まで、二枚——」と逐琢が窓口に向かっていう。

「——フェリーは、どうなったんだ」

「ところが俺は、船に酔うんだ」

「むずかしい男だな、君は——」

「いや、もし君が、どうしてもフェリーがいいというなら、残念だが一人でそっちを廻ればいいと思つてさ。落ち合うところはどうぞ一緒だろう——」

昨年の晩秋、私は三年ぶりで病院に入った。三年前に、手術が二度続き、二ヶ所の病院を転々として九死に一生を得たときの、根拠地になっていた方の病院である。そのときは家族は葬いの準

備をはじめ、麻雀の専門誌は追悼のための特集号をつくって平素の三倍も部数を刷った。そこへ私が退院して出てきたので、その社の社主に、おかげで売れ行きが悪くなった、と叱られた。そのとき、特に二度目の手術を執刀した医師たちから、一ヶ月に最低一度は身体を見せに来ること、と固く命じられていた。

二度目の難手術をした病院は、全国から重病の患者が先を競って集まってくるところで、私のベッドの四方八方ともに、病名をきくと暗澹^{あんたん}としてしまうような患者ばかりであった。週に一度、部長廻診があるが、そのとき、胃潰瘍だの胆石だのという平凡な病名の患者は声もかけて貰えない。それらの患者たちは日がたつほどに一人前の病人としての矜持^{きんぢ}を失なうて、周辺に気をかね、こそこそと恥じいるように手術室に向かったりする。

私も、そのときは胆管閉塞からくる重症の黄疸で眼までまっ黄色になっていたが、病気の発端は胆石の手おくれであるから、あまり大きな顔つきはできない。検査も手術もかなりきびしい経験ばかりだったが、名をきくだけで暗澹とするような病気の患者ならいざ知らず、私などが騒いでは嗤^{わら}われると思って動じない顔をしていた。

おかしいもので、平生は私も、事を悪く悪く考えて屈託に沈みがちであるが、ひとたび病院に入ってしまうと、そういう神経が奇妙に欠落してしまふらしい。私だけなのかどうか、存外にあるこれに病まなくなる。患者というものは、医師や看護婦の命令は絶対で、自分の主体性というものはほとんどない。さア検査、といわれれば検査室に行くし、灌腸、といわれればパンツをずりおとす。一寸先のことが自分でわからない。消灯になると、ああこれで、明日の朝まで自分の時間で居られるな、と思う。そういう日々が続くうちに、なにかもゆだねた気分になって、思いわずらわずただ黙々と草を喰む家畜のような心境になるのである。ひよっとすると、軍隊と病院はかかる点で似ているかもしれない。

贈られてくる雑誌類を、結局捨てるよりも同宿の患者諸氏に利用してもらおうと思って、ひとかかえ抱いて一階の受付におりて行き差しだした。そこへちょうど見舞客が入ってきたので、ロビーの椅子にかけて話しはじめた。

客から煙草を一本もらって吹かしだしたところに、看護婦が駈けつけてきた。

「無茶をしないでください。さアすぐに病室に帰って」

「ああ、そう。じゃ、すぐ行きます」

「駄目。一緒に行くのよ。歩けますか」

そのときは絶対安静というより、危篤状態で、面会はおろか寝返りも打てないはずの状況だったというのである。

「何度も、そういったでしょ——」

と看護婦はいったが、私は忘れてしまっていたのだった。大学病院では、大きな内臓外科病棟の患者で、二人だけ、小便がコーヒー色になってしまっていて、明日をも知れぬ抜群の者が居り、その一人が私であった。私の黄疸指数は、普通人がゼロとして五十近くもあり、十以下に落さなくては手術も不可能で、おまけに入ってきたとき、血圧二百数十、白血球四百余、脱水状態、という有様で、玩具箱をひっくり返したような身体だった。

便所には患者一人一人の小便をいれた容器が並んでおり、私は自分のコーヒー色も見て知っていたが、だからどうだという感慨が湧かない。直ると信じているわけでもないし、といって、死ぬかな、どうかな、という不安も、パタッと忘れたように欠落していた。身体が動くうちは、動く。動けなくなれば、動かない。ただ簡単にそう思っていただけだ。

点滴注射だけで、数ヶ月の間、食物はいつさい受けつけなかったけれど、そのくせ、あちこちのうまい物のことばかり考えて、女房を買いに走らせる。最初の手術をしたあとは、深夜、病院